「河上　秀」を執筆して

草川　八重子

河上ワールドの新参者にこういう機会を与えて頂き、感謝しています。今回は私の生涯最初で最後のことでしょうが、河上先生にならって原稿を書いてきました。

まず「河上秀」を読んで頂きありがとうございます。ほとんど毎週お手紙を頂く方、間違いをただちに指摘してくださる方、本当にありがたい読者に恵まれて、作者冥利に尽きる思いです。これは全く河上先生という巨大な存在の庇を借りているおかげであると、感謝しております。

今日の私の話に見出しをつけるとすれば、（一）河上先生との出会い、（二）ご縁でめぐり会った人たち、（三）「河上秀」を書く私の立場ということになりましょうか。

（一）

私が先生と出会ったのは、一九五二年の河上祭でした。当時高校三年生、昼からの授業をサボって、四、五人ででかけました。京大の法経一番教室で、その時は毛利菊枝さんの詩の朗読、大山郁夫の激越な演説がありました。「若人よ、わが屍をのり越えてゆけ」といわれたのを憶

えています。その日大変感動して、京大から右京区山ノ内の自宅迄、途中で友達と別れながら歩きました。

その日一緒に行った友達に、河上肇という人をもっと知りたいというと、

「河上肇は経済学の偉い学者だが、昔の人だから文章がむつかしい。この本から読むといい」と宮川実の「第三貧乏物語」を借してくれました。小説以外のものをほとんど読んだことのない私には、充分むつかしくて何とか読み了えたものの、ほとんど理解できませんでした。だから河上先生のものはもっとむつかしくて絶対に理解できないと、その時思い込んでしまったのです。

それから永い歳月がすぎて、二度目の出会いは生誕百年の記念に、思文閣で先生の展覧会がひらかれた時でした。そういえば昔、河上祭に行ったなあ、と思いつつ寿岳先生についていったのです。当時私は章子先生の研究室に週二日、お手伝いに行っておりました。

この日、私が衝撃を受けたのは、芳子さんの写真パネルと、その下につけられたわずかな解説文にでした。真中にまっすぐ分け目をつけて後でまとめた髪形の、清楚な美しい人が少しはにかんで、ちょっと淋しそうに写っています。確か「父の影響をうけて、地下活動に参加した二女芳子さん」とありました。

その時、河上先生という巨大な山脈の麓に私は立ったのだと思います。先生は家族にそんな影響を与える方だったのか。仮に思想的な影響を与えても、戦前の地下活動という危険極まりないところに娘を送りだすのは、どんなに大変なことだったか。多少とも理解できた私は、その時身内を戦慄が走ったのです。

すぐ「自叙伝」を買って読みました。感動の書でした。泣いたり笑ったり、泣きながら笑ったりして読みました。何に感動したかといえば、第一には、こんなにも率直に自己を語る人がいたんだ、ということです。逃げず、つじつまを合わせようとせず、正直に率直に語るべき自己をもつ人に出会ったよろこびです。

これだけ率直に語れるのは、栗の実が外側の固い皮をおしひろげて成長していくように、内側にキッチリ詰った自信と充実した人生があったからだと思いました。「政治的配慮」や「自己規制」や誰かにおもねるなどということ一切なく、かといっていいたい放題の傲慢さは全くなく、自然体で自由に自分を語れる、その精神に私はほとんど呆然としたのです。

第二に、先生は生涯脱皮を続けられた、ですからいつ

もその皮膚は柔かく、敏感でいられた、そのことへの尊敬です。ブルジョワ経済学からスタートされて、マルクス主義にたどり着かれた。でもそれが終点ではなかったと私は思います。刑務所ですごされた歳月は、先生に決定的な影響を与え続けたと思います。

思想はいささかも変わっていない、と先生は書いておられる、それはもちろんその通りでしょう。でも、先生は肉体的には大変痩せていても、すべての体験を無駄にせず自分のこやしとされた方です。同じである筈はありません。

戦前と現在では、平均寿命から考えると二十年の開きがあると聞きました。戦前の五十歳は現在の七十歳だというのです。先生は栄養状態が悪いなどということはなかったので、その半分としても下獄された五十四歳は、現在の六四、五歳の感覚だろうと思います。その歳になって現在の七十近くまで刑務所での暮しを強いられたのです。ダルマ大師以上の修業です。

現在の刑務所を知りませんが、おそらく人権意識の無い戦前の刑務所のひどさは「自叙伝」に書かれた以上であったと思います。更にそこで病気をされた。病舎に入って、最底辺でうごめく犯罪者たちとベッドを並べて三ヵ月をすごされた。私は自叙伝のこのくだりが一番好きです。

小菅刑務所は長期刑の罪人が集められた所で、三犯四犯と罪を重ねた人や、強盗、殺人などの凶悪犯が多かったといいます。先生も最初はひとくくりに凶悪犯と思っておられた。でも、病舎や準病舎でベッドを並べてみると、一人一人に事情があり、個性があり、経歴があるのが判ってきます。彼らも一人の人間なんだ、むしろインテリより人間的なのだとも書いておられる。

もともと文章を書くのが何より好きな先生が、チェーホフ、ゴーリキー、芥川、鴎外、長塚の全集、白楽天や陶淵明を熟読された。本格的な文学修業もなさったわけです。そして犯罪を犯すに至った事情を抱え、懲役人となっている人達と出会われた。彼らをみる先生の目は作家の目です。一人一人をスケッチしておられるが、それぞれチェーホフの小品を読む味わいです。暖かくみるだけでなく、先生は彼らにとても親切でした。右手の不自由な男と入浴すれば背中を流してやったり、手拭をしぼって身体を拭いてやったり、動けなくなった病人には声をかけ、食欲がなくて握り飯ならたべられるという男には、おにぎりをつくってやったりもされました。

底辺の犯罪者たちとの親身な交流に、私は先生の民主主義者としての真骨頂をみる気がします。若き日に無我苑にとび込まれた先生と重なる所があるのかもしれません。でも刑務所でおびただしい宗教書を読まれた先生の、病む人たちへのいたわりにはいわゆる宗教臭は全く感じられません。

先生は又刑務所で死んで引きとり手のない哀れな囚人の、簡単な葬儀にも何度も立ち会われました。自ら庭に咲く花を切って活け、香をたかれました。

大学教授、学者としての先生の人生とは、交わりようもない人たちとの交流でした。「貧乏物語」を書かれた先生ですから、このような底辺の人間がいることは、もちろん昔から御承知のことでした。でもそれは学問的な究明の対象であっても肌ふれあっての付きあいなど思ってもみられぬことだったでしょう。

懐深い、人間に対する尽きせぬ興味をもって彼らをみられた、その時獲得された作家の目を、生涯もち続けられて「自叙伝」を書かれた、と思います。

私はまず作家である河上先生と出会ったのでした。それは大変幸福な出会いでした。私がその時四十代半ばという年齢であったことも、幸いしていたと思います。

そして更に先生を身近に感じるようになったのは、寿岳文章先生を通してでした。しづ先生が亡くなられた後、私は文章先生のお手伝いに行くようになりました。御承知の通り、文章先生は政男さんの家庭教師をなさったご縁で、河上先生を人生の師と仰がれた方です。

先生はたびたび河上先生のことを話してくださいました。

はじめて河上先生と会われた日のこと、氷川町時代の河上家を訪ねられたときのこと。「ちょうど『紙漉村旅日記』の特装版が出来て、それを持って有栖川宮家へ行ったんですよ」

文章先生、しづ先生の紙漉村研究は有栖川宮家から研究費の援助が出ていたときく。

「午前中に宮家を訪ね、午後には刑務所から出て来た人を訪ねる、そんな経験をしたのは日本国に人多しといえども、私くらいなものでしょうなあ」

文章先生は愉快そうにいわれました。お元気で柔かなお声がいつでも甦ります。

河上先生が京都に戻られてからのこと、物のない時代、紙にも不自由なさった河上先生がウチワやマッチ箱の裏にまで、何かを書き留めておられたこと、

「あなたは囲碁をなさいますか」と問われて、「いや、しません」との文章先生のお答えに、とても残念そうな顔をなさったこと。

「囲碁を知っていたら、奥さんのお留守の間もっとお慰めできたんですが…」と文章先生がたびたびいわれたことも忘れられません。

丁度河上肇全集が岩波書店から刊行されており、文章先生は二二巻獄中日記と二三巻晩年の日記に解題を書かれました。当時はおめにかかる毎に河上先生の話をうかがったものです。

私の中にもいつしか河上先生とその御家族が、とりわけ芳子さんが栖みついておりました。いつの日か芳子さんと、限りなく美しい晩年をすごされた先生御夫妻を書きたい、と思うようになっていました。

文章先生は私の野望を励まして、是非とも完成させて下さいといわれました。そして、岩波書店と交渉して、御自分で解題を書かれた二二、二三巻の外に、二八巻（晩年の書簡）と年表ののっている別巻をもらって下さいました。二三巻の扉には「これからの仕事に最も関係の深いこの巻のはじめにわが名をしるして、草川八重子夫人へのはげましとする、一九八三年十一月下浣　寿岳文章」と書いてくださいました。

先生のお元気な間にどちらかを完成させたいと思いましたが、芳子さんを百五十枚書いて、頓座しそのまま何年もすぎました。

残念ながら、文章先生に「河上秀」を読んで頂けなくなりましたが、章子先生がお二人分読んでいて下さると思っております。

（二）

芳子さんや晩年の河上先生を書こうと思ったのが一九八二年頃からで、ぼちぼちと資料を集めました。焦点を芳子さんにしぼって、本格的に取材を始めたのは一九八三年からでした。幸いなことに、当時はまだ先生が獄中におられた時の留守宅、中野区相生町には空襲で焼け残った戦前の家が何軒かありました。

芳子さんが留置された大崎署は戦災で焼けて、西へ四百米移っていましたが、まだ戦後すぐ建った木造のものでした。先生が赤ちゃんだった洵子さんをつれて散歩なさった氷川神社の周辺にも、昔の悌をしのばせるものがありました。芳子さんが働いておられた両国橋のガソリンスタンドは無くなっていましたが、川べりの柳は芳子

さんも眺められたものではないか、と思って私も眺めてきました。

八三年七月には、内田丈夫さんを訪ねてお話をうかがいました。内田さんは前年の九月から入院されて、腎臓を片方とる手術と、十二指腸潰瘍の治療を受けて、その年の四月に退院された、まだ寝たり起きたりの時期でした。

内田さんは河上先生と秀さんの連絡役をされ、先生と一緒にいて椎名さんの家でつかまった方です。ガソリンガール時代の芳子さんとも二、三度会っておられます。後に満鉄の調査部に入られて、大連で芳子さんと再会されました。昭和十九年内地へ出張して五、六人の友人と晩ごはんを食べられたのが、共産党再建の相談をしたとデッチあげられて逮捕され、内田さんは大連で中国共産党との連絡員であったと勝手に決められて懲役五年の刑をいい渡されました。この時のテロはずいぶんひどかったそうです。「回想の河上肇」や秀さんの「留守日記」のあとがきにもみられる通りの、私のイメージ通りのやさしい方でした。

「今年の秋はまだ少し無理と思いますが、来年の春には法然院へ、先生のお墓に詣でたい」とおっしゃって、「その時は御一緒に」と約束しました。

内田さんは、芳子さんが逮捕された後、芳子さんが書いたような「手記」形式で「捕われの囹圄より」と題して記者の書いた婦人公論をもっておられました。私はコピーをとらせて頂きたいとお願いし、息子さんの奥さんが駅前のスーパー迄一緒に行って下さいました。

その途中で何度か、彼女は私にアノ…といいかけて寸前で止められました。私は彼女が何をいいたかったのかよくわかりました。

「おっしゃらなくても、よくわかりました。内田さんの御病状は来春京都へ来るなど、とても無理なのですね…」

私は心の中で彼女にいいました。声に出さない対話は充分に通じたと思います。二人共何もいわず彼女はコピーをとってくれ、私はお礼をいって別れました。それから半年ほどして、内田さんは亡くなられました。

その時の上京では、芳子さんの女学生時代の親友だった二人の女性にもおめにかかり、芳子さんの生き生きした女学生生活や、慶応病院の看護婦姿の美しかったこと、大崎署の留置場で二十人がつめこまれたことなどを聞かせていただきました。

八四年一月には井上信子さんに会いに、当時おすまい

だった田無市に行きました。信子さんには後に京都でもおめにかかりましたが、彼女は京都帝大法科大学学長、井上密（大正二年からは京都市長）氏の長女で、芳子さんと一緒に大森事件でカムフラージュのため大塚有章と車にのった「盛装した令嬢」井上礼子さんのお姉さんです。礼子さんのことや、当時の社会の空気を話してもらいました。

河上先生御一家とは直接の関係はありませんが、時代の空気を呼吸していた人を何人か訪ねました。野呂栄太郎夫人の塩沢富美子さん、細川光子さん、久保美代子さん、といった方々です。（久保さんは旧姓笹井で留守日記に登場）

同志社大学に特高月報が揃っていると聞いて、コピーさせて頂き、京大経済学部では細川さんにお世話になって、秀さんの手紙や芳子さんの手紙をコピーさせてもらいました。

周辺調査を一通りすませてから、鈴木洵子さん、羽村しづさんに会っていただきました。肉親でなければ語れないお話をたくさんお聞きすることが出来ました。先に洵子さんたちにおめにかかると、なまけものの私は取材に手をぬいてイメージをつくってしまうと思ったのです。もちろん岩国の河上家もお訪ねして、写真や資料をみせて頂き、大変お世話になりました。しづさんには、あなたなりの秀を自由にかいて下さいといわれて、とても楽になりました。

お話いただいたことがどれほど生かせたかはわかりませんが、どの方とも生涯忘れられない出会いとなりました。

おめにかかりたいと思いながら、ぐずぐずしている間に機会を失った方もありました。取材を始めた後もお元気だった「お春さん」立野正一さん、小島トミさんたちにはとうとうお話をうかがうことが出来ませんでした。

（三）

まだ文章先生がお元気な間に、私は芳子さんを百五十枚書いて頓座しました。何故完成できなかったかといえば、もちろん力量の問題もありますが、最も大きな原因は勇気が足りなかったからです。

芳子さんが地下活動に参加して官憲に追われるようになるのは、御承知の通り大森ギャング事件に関わった一人としてでした。当日（昭和七年十月六日）午後三時に、芳子さんは叔父である大塚有章に新橋駅に来るようにいわ

れていました。二番目にいい着物を着てくるように、と大塚氏がいったと伝えられています。一番大切な着物に事件のにおいが染みこまないように、彼らしい配慮だったのでしょう。井上礼子さんも洋装で到着し、三人は省線で大森駅に行きました。三十分ほど海岸通りを散歩して四時駅に戻り、西代義治の降りたタクシーに三人が乗り込んで都内に戻る、表面的にはそれだけのことでした。

途中二度非常線にひっかかって車を止められましたが、「親戚の結婚式で帝国ホテルに向う」御一行は、すぐ通してもらえました。そのために盛装した二人の令嬢が必要だったのです。

西代氏が降りたタクシーには、銀行で奪った金の入ったトランクが残っていました。座席の下に立てて三人はそれを隠して席かけていたのです。運転手ももちろん仲間の一人でした。芳子さんの役割はそれだけでしたから逮捕され痛めつけられましたが、不起訴でした。

でも私は芳子さんが、いわれるまま何も知らずにお人形のように動いたとは思っていません。もっと積極的に動いておられたと思います。銀行襲撃事件はもちろんスパイ松村の謀略ですが、彼がその具体的なプラン迄つくったわけではありませんでした。十月末の全国代表者会議の準備に必要だから十月七日の午前中迄に少なくとも一万円を調達するように、と指示しただけです。

銀行の前には、暴利むさぼっている病院の会計課をねらう計画もありました。そのため、順天堂、杏雲堂、浜田病院、至誠病院が候補にあがり、入院手続書をもらってきて入院料の支払日を調べ、この四病院のうちの三ヵ所を襲えば一万円集まると考えられた時もあったのです。

芳子さんは入院手続書をもらってきたりして協力しておられます。事件後も関係者が次々逮捕される中、津田青楓に頼みに行って、彼の知り合いの別荘に大塚を隠したり、知りあいの新聞記者から公表されていない情報を聞いてきて伝えたり、亀戸の貧民街に家をみつけて二人で暮し、大塚が党との連絡回復するのを助けたりされました。井上礼子さんも芳子さんも、この時期実に生き生きと活躍しておられる。井上さんは警視庁の電話交換嬢と近づいてお友達となることにも成功されたそうです。彼女たちはこの事件がスパイによってつくられた罠であることを知らず、天真爛漫に行動されたと思います。そこまでは私も描くことが出来ました。

でも彼女たちの活動を支えた当時の共産党の方針にふれないわけにはいきません。当時は「我党はプロレタリ

アート、農民の大衆的武装蜂起による国家権力の奪取を、労働者農民政府樹立、社会主義建設をめざしているのだ」と明記されていた時代です。

確かに国民男子は二十歳になると徴兵検査を受け入営すれば銃を支給されて人殺しの訓練を受けました。その当時の「武装」「武器」感覚と、曲がりなりにも「平和」で徴兵制のない社会が五十年続いた現代では国民の感覚が全く違います。絶対主義天皇制の時代と一応民主主義社会との違いでもあります。現代を生きている読者にその感覚をわかってもらえるか、その時代を共に生きてもらうことが出来るか…。私にはそれは先のみえないはるかな道のりだと思われました。又私は芳子さんが預った二挺の拳銃の冷さ、重さも、スパイが跳梁した時代も自分の筆にすることが、恐ろしくて書けなかったのです。

京都民報社から連載小説の話があった時、私はただちに「河上秀」を書きたいといいました。秀さんの立場からなら、芳子さんのこともクッションを置けます。秀さんなら直接の当事者ではなかったので、一定の距離を置いて書くことが出来ます。

リアリストで、大地に根をおろした生活者の秀さんの視点から、当時の運動もみられると思いました。民報の方では「どうしても河上秀さんでなければいけませんか」というようなことばがありました。おそらく、秀さんを主人公とすれば当然、大塚有章、鈴木重歳といった人達を描くことになり、彼らが共産党を除名されている、というところにひっかかったのだと思います。でも私は押し切りました。かなり自己規制して書いているつもりですが…。

「河上秀」を読んで下さる方から頂くお手紙の中に、そのことにふれたものも何通かありました。京都民報の小説に、大塚有章の名がたびたび出て来て、びっくりしている、というものです。びっくりの中味は三種類あって、一つは作者である私が迫害を受けるのではないか、というものです。これは大変失礼な、共産党がスターリン時代の、あるいは東独のような「全体主義」政党として考えられているところからくる意見でしょう。次は時代は変わってきたのだなーという感慨を洩らされるもの、秀さんを書くのに、しょっちゅう河上家に出入りして一家に影響を与えた弟が登場しなければ不自然極まりないのですが、十年前なら考えられない、というのです。文学的リアリティを犠牲にしても、政治的立場を優先させるのが普通であったと。私もそこでおじ気をふるったの

でした。

第三には、といってもこの一、二、三の境界はあいまいですが、本当にこういうことが自由に書けるのなら、共産党を見直した、という意見です。本当に民主主義を大切にする政党なのか、それならもう一度信じてみたいという、私には最もうれしく励まされた手紙でした。

私が最小限度の登場させ方ですが、ごく普通に大塚氏を書いたり、ほんのちょっぴりですが、ハウスキーパーの問題にふれたりしているのは、わざとイヤミをいっているわけではありません。暗部には蓋をして、いいところだけを大声で賞め讃えるという作品は書きたくないだけです。ごく内輪にだけ通用するものにはしたくないのです。

「河上秀」は今日付の紙面で第七章荒川堤が始まりました。これが七回、次の第八章座布団もたぶん七回、それにエピローグが三回ほどで、ひとまず終りにしようと考えております。私の一番書きたかった河上先生の晩年、「限りなく美しい夫婦のものがたり」にまでは至りませんでした。御夫婦が京都に戻られてからの、戦争中、敗戦前後は又稿を改めて書きたいと思っています。大急ぎで端折っては書きたくないのです。

河上先生御自身が一番の、河上伝説破壊者でしたから「これが先生の実像だ」と差し出すものは何もありません。秀さんも「自叙伝」や「留守日記」でみなさんがイメージされたものを出ないだろうと思っています。

ただ「留守日記」にはまだまだくめども尽くせぬ泉のように、いろんなものがつまっています。何気ない一行の背景には、実に広い世界があって、ものかきとすればそういう世界に入って行きたいのが本音でした。

私は「自叙伝」によって河上先生と出会うことが出来たのに、今回の執筆で「自叙伝」ほど邪魔なものはありませんでした。先生が日記と書簡、それに学術的な論文だけを残されたのならどんなにいいかと思いました。

「自叙伝」は完結した文学世界をもっているので、それを資料とすることは出来ません。でも御自身の体験されたことを正直に、率直に、それ以外にはない適確な言葉で書いておられるのです。大切な所はほとんど「自叙伝」に出てきます。

先生が自叙伝で力をこめて書いておられるところは、私は力をぬくようにして書きました。でも自叙伝に出てくる有名な場面も、書かないわけにはいきません。「自叙伝」を忘れて、自分の言葉で書いたつもりでも、後で

読み比べてみると、ほんの少し表現が違っているだけ、とわかってがっかりすることが多くありました。でも「自叙伝」や河上先生を知らない人にも読んでもらいたいので、そこに苦労がありました。

作品の出来については、読者の判断に任せる外ありません。河上先生と出会い、資料を集め、書きたいと思うようになって十数年、ずっと先生御一家とお付きあいをしてきました。これからも永いお付きあいになると思います。知れば知るほど、他人ではない肉親のような懐しさを感じます。